

「Q&A 腹腔鏡下胆嚢摘出術 こんな時どうする？」

滋賀医科大学教授・第1外科 小玉 正智 監修
 滋賀医科大学・第1外科 来見 良誠 著

東葛病院・外科

大 野 義一朗

胆嚢摘出術に始まった外科の鏡視下手術は、ごく短時間に目覚ましい発展を遂げた。今や外科手術の中で鏡視下に行うことのできない手術はないかの様相を呈している。腹腔鏡下胆嚢摘出術は既に古典的な存在になりつつある。なぜ今更腹腔鏡下胆嚢摘出術なのか、そんな疑問を持って本書を手にしたが、たちどころに自分の未熟さを痛感した。

著者は滋賀医科大学第1外科で25に及ぶ関連施設を直接指導されてこられた。教えることが、筆者を常に“初心者”の問題意識に立ち戻す。“手術時に全く予想されないような質問”“一見簡単そうに見えるが、実際に自分自身で遭遇した場合には思案するような問題点”が次々と出され、1つ1つを詳細に検討し解答を出していく。その積み重ねが本書の元となっている。著者の非凡なセンスと卓抜した技術が本書の随所にかいま見られる。しかし、本書の主眼はそこにはない。自分のノウハウを披露するのではなく、誰がやっても同じように成功する手技の究

明、すなわち“標準術式の確立と安全性の追求”が著者の狙いである。普遍性こそ科学技術なのだという科学者の思想をそこに感じるのである。

本書は基礎編、応用編、適応編、手技編、器械編にわたる総計64項目を取り上げ、それぞれ見開き2頁のQ&A形式で構成されている。基礎編では手術を円滑に進めるためのコツが、応用編では術中の不測の事態に対する対応がまとめられている。胆嚢管の合流形式や走行異常、胆嚢動脈の分岐など、根拠となる研究も示されており説得力がある。適応編では、合併症や併存疾患を有する場合の手術適応の考え方がまとめられている。手技として確立していると共に、正確に教え伝えることができこそ標準術式を支える技術と言える。手技編は剥離鉗子のこすり方に及ぶまで、考え抜かれた標準手技が呈示されており、最も本書らしい部分である。また、手術書に見え馴染まない器械編が組まれているのは、器械の進歩、器械のわずかな差

が手術のやりやすさを左右する本術式の特徴を反映してのことで、思いのほか得るところが大きい。

本書は、術者経験のある医師には直面した難問に的確に答える重宝な参考書となる。ポケットサイズで携帯に便利な判型となっているのも心憎い。また項目は、気腹針の刺入から鉗子の使い方、ドレーンの挿入方法に至るまで手術操作のすべてを網羅しているので、これから術者となる医師には系統的かつ実践的なテキストとなる。そして全編を貫く、教えることに徹したスタンスは、後輩を指導する立場の医師にとって示唆に富むものとなっている。

総じて“こんな時どうする？”というタイトルの軽々しさにそぐわない総合的な1冊に仕上がっている。ごく普通の病院のごく普通の外科医が欲しかったのは、実はこんな本なのである。

A5 頁176 図45 1996 定価
 3,914円(税込) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)